【エッセイ部門・奨励賞】

友だちがくれた安心

香川県立視覚支援学校　第２学年　木村心音

私には幼いころから視覚障がいがあり、現在は視覚支援学校に通っている。視覚障がいがあることが分かったのは４才のころで、私は保育園でのお絵描きの時間、リンゴの色を茶色のクレヨンで塗ったそうだ。加えて線の上をハサミで上手に切れないので、「一度病院で診てもらってください」と保育園の先生の方から母に相談があった。

そこで分かったのは、視神経委縮による、弱視と色覚異常。将来まず車の運転はできないと、医師から単調に言われた母は、帰りの車で泣いたらしい。

母は私が生まれるよりも前に、子供を一人流産していて、加えてようやく生まれた第一子にそんな障がいがあると分かれば、それはもうどうしようもない思いだったと思う。

私はひどく冷めた子供で、昔から人の感情にも、自分の感情にも、そこまで固執しなかった。友人からはよく「こぉは冷めとんね」だとか、「泣かせてみたい」とか、そんなことを言われていた。私自身、人の意見…悪口などを辛く思うことはなかったし、何か悲しいことがあっても意地になっていた部分もあったのかもしれない。友人の前で、泣いたり辛いと言えたりしたことはなかった。

私はこの夏、生まれて初めて東京に９日間滞在した。夏休みならではの旅行…ではなく、「筋生検」という筋肉について調べる過程で、体内の筋肉を取り出す簡単な手術をするために東京の病院に入院していた。

私は中学のころには聴力も弱いことが分かり、中学二年の冬には歩けなくなって、二か月間の入院をした。幸いにも三年に上がるころにはふらつきながらも自力で歩けるようにはなったが、その年の冬、また同じように歩行ができなくなり、入院をした。けれど昨年と違い、退院後も私は一人で歩行することができず、高校二年生になった今でも車いす生活を続けている。原因は分かっておらず、その原因を探るために、今回筋生検を行った。

目が悪くても、耳が悪くても、歩けなくても、どこかで自分を責めている節がある母になぜとも言えず、私は私だと、周りの人のおかげでこうして何不自由なく暮らせているのだからと割り切っていた、つもりだった。でも、どこかで弟妹や友人など周りの健常者に引け目を感じていたのかもしれない。

東京の病院で、ＯＴとＰＴの先生についてもらい、リハビリをした。地元の話をしたり、服の話、靴の話…色々な話をしたりする中でＯＴの先生に「お祭り、行かないの？」と訊かれて、「同級生に会いたくない」と、気づけばそう答えていた。そのあとにされた「友達と遊んだりしないの？」という質問にも「車いすだと迷惑かけるから…」と、頭の隅とか、そういうところにあった言葉が、ぽろりと口を吐いて出ていた。服も、靴も、着ていくところが、履いていくところがない。何気なくそう言うと、翌日その先生は車いすユーザーがよく

使う店やアプリ、交通機関の使い方などが詳しく書かれた資料を用意してくださっていて、その日のリハビリでは、車いすユーザー用に持っている服をリメイクしてくれる会社があることも教えていただいた。

何気なく言った、悩みとも言えないそれに真摯な対応をしてくださったＯＴの先生には驚いた。

私の身体について負い目を感じている母にも友人にも相談できないことを、聞き流してくれてよかったことを、もう二度と会わないだろう人に聞いてもらって、それに答えが返ってくるなんて思いもしなかった。

「ありがとうございます」そう言った私に、その人は、「好きな服を着てる心音ちゃん見てみたい」と、言ってくれた。

私はなんだか訳の分からない気持ちになった。嬉しいとか、そういうことを素直に思える性格でもなくて、ただ今度買い物に行ったときには「この言葉思い出すんやろうなぁ」と漠然とそう思った。

東京でそんなことがあって、家に帰って中学校からの友達に「車いすやけど遊びに行きたいって言ったら付き合ってくれる？」とメッセージを送った。本当にそんなことをする気はなかったけれど、実際に会って訊ける勇気などなかったけれど、そのグループではそれぞれがそれぞれの言葉で、私の意見を肯定してくれた。看護師を目指す友達からは、「車椅子実技満点の私に任せとけい」と返ってきて本当に行っても安心だなと、少し笑ってしまった。友人たちは多分対面でこの話を掘り返すことはない、そういう人たちだけれど思い切って訊いてみてよかった、そう、思えた。

私には、夢がある。私と同じように、障がいを持って生きている子供たちの心を助けること…人の心が分からない私が、少し前までの私と同じように、自分の心にも気づけずにいる子供たちを助けたい…そういう夢が、この夏また、大きくなった。